



福島県立  
安積高校

学びに向かう集団づくり

# 卒業生を講師役とした「安積セミナー」で難関大への意識を高める

◎2001年度、男子校から共学となる。02年から5年間、スーパーサイエンスハイスクールの指定を受ける。開拓者精神、文武両道、質実剛健を教育の精神とする。自由な校風を重んじ、制服は設けていない。敷地内の旧本館は国の重要文化財。

設立	1884(明治17)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約320人
11年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、東北大35人、福島大22人、東京大6人、京都大2人などに計230人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、東京理科大、明治大、早稲田大などに延べ415人が合格。
住所	〒963-8851 福島県郡山市開成5-25-63
電話	024-922-4310
Web Site	<a href="http://www.asaka-h.fks.ed.jp/">http://www.asaka-h.fks.ed.jp/</a>

変革のステップ

背景	実践	成果
<p>◎第1志望校合格への意欲が維持できず、易きに流れる傾向があった</p> <p>STEP 1</p>	<p>◎卒業生の力を活用した「安積セミナー」を年2回開催。難関大を目指す集団づくりを行う</p> <p>STEP 2</p>	<p>◎卒業生の言葉で意欲が高まると共に、低学年時からすべきことが分かり、目標を持って学ぶ姿勢が育つ</p> <p>STEP 3</p>

易きに流れる生徒を  
学びに向かう集団にしたい

創立127年の伝統を誇る福島県立安積高校は、県内屈指の進学校で、旧帝大をはじめとする難関大に多くの生徒が合格する。自由な校風が伝統であり、制服はなく、生徒の愛校心が強いのが特徴だ。

長らく地域から厚い信頼を寄せられてきた同校だが、近年、教師は生徒の志望大合格への意欲をいかに高め、維持するかに頭を悩ませていた。成績上位層・下位層を問わず、「易きに流れる」傾向が目立ってきたからだ。例えば、毎年、入学時には30人ほどが東京大を志望校に挙げるが、学年が上がるにつれてその数は減り、実際に受験するのは10人程度だった。3年間を通して意欲を高めていけば、もっと多くの生徒が初めに掲げていた目標に挑戦できるのではないかとこの思いがあった。

こうした雰囲気改善しようと、進路指導を大きく変えたのが、123期生(2010年卒業)の学年団だった。当時担任で、現在進路主任の森下陽一郎先生は次のように振り返る。

「当時の本校は、学年全体で切磋琢磨し、難関大に果敢に挑戦するという雰囲気弱かったと思います。学年全体の意欲を揚げるためにも、成績上位層から下位層までが一体となって上を目指そうとする集団をつくらうと

学年主任をはじめ、学年団で考えました」  
 最も力を入れたのは、生徒への意識付けだ。  
 学年集会で「君たちは一人ではない。みんなで  
 受験に向かおう」と繰り返し伝え、横のつなが  
 りを意識させることを心掛けた。並行して「も  
 っと学校を頼ろう」「学校で勉強しよう」など  
 と声を掛け、学校への帰属意識を高めた。加藤  
 知道教頭は次のように話す。

「本校には素直な生徒が多くいます。放課  
 後、学校に残って勉強する生徒が徐々に増え



福島県立安積高校教頭  
**加藤知道** Kato Tomomichi  
 教職歴27年。同校に赴任して3年目。「誠実に物  
 事に当たる。生徒だけではなく、教頭として先  
 生も『その気』にさせたい」



福島県立安積高校  
**菅野多美子** Kanno Tamiko  
 教職歴32年。同校に赴任して6年目。教務主任。  
 「考えて、考えて、考え抜いて、分かった時の楽  
 しさを伝えたい」



福島県立安積高校  
**野内明** Nouchi Akira  
 教職歴23年。同校に赴任して6年目。教務副主任。  
 「イメージする力の基盤となり、技術となる『国  
 語』の指導を追究する」



福島県立安積高校  
**森下陽一郎** Morishita Yoichiro  
 教職歴15年。同校に赴任して5年目。進路主任。  
 「生徒は次世代を担う大切な存在。彼らの可能性  
 を引き出したい」

始め、クラスメートのそうした姿を見て、次  
 第に輪が広がっていきました。共に机を並べ  
 て学ぶ中で、仲間意識や良い意味でのライバ  
 ル意識も生まれました」

## 1、2年生で追試を徹底的に行い 3年生への弾みをつける

それまでも、土曜講座や月例テスト、追試な  
 どを実施し、基礎力及び発展力の育成に努めて  
 いた。しかし、どの科目をいつまで教師主導で  
 引っ張っていくか、国語、数学、英語の3教科  
 をどこで仕上げ、遅れがちな理科と社会とのバ  
 ランスをどう取るかが課題だった。122期担  
 任で、現在は教務主任の菅野多美子先生は次の  
 ように話す。

「123期は、1、2年生の時に徹底して追  
 試を行い、2年生後半には学年全体で東京大  
 の過去問を解くなどの取り組みをしました。  
 文系でも数学を諦める生徒が減り、難関大を  
 目指す意識が高まったのだと感じています」  
 1、2年生での数学の基礎の徹底は、上位層  
 にも変化をもたらした。現役東京大合格者数が、  
 122期生は6人全てが理系だったが、123  
 期生は7人のうち5人が文系の生徒だった。  
 追試の徹底は、しっかり基礎を固め、3年生  
 への助走とする意味も大きかった。

「3年生になると追試はびたりとやめまし

た。ここからは、生徒自身の力で受験に立ち  
 向かう必要があることを示すためです。2年  
 生までに十分に基礎を固めたからこそ、3年  
 生で手を離す指導が出来ました」（森下先生）  
 一連の指導改革により、123期生の進学実  
 績は全体的に向上した。更に、生徒同士で切磋  
 琢磨する学習集団が形成されたことに、教師は  
 自信を深めた。

## 卒業生を講師とした 宿泊セミナーを実施

123期生での成功を機に、生徒の力を伸ば  
 し切れる学校となるべく、10年度には学びに向  
 かう生徒集団づくりの新たな取り組みとして、  
 2泊3日の「安積セミナー」（P.20図）を行っ  
 た。これは、1、2年生の東京大志望者を対象  
 に、卒業生の東京大生を講師に迎えて行う勉強  
 会だ。10年度は8月と12月、講師役の大学生の  
 帰省時期に合わせて実施し、いずれも40人ほど  
 が参加した。年2回の開催としたのは、取り組  
 みを点で終わらせず線をつなげ、学習への意欲  
 を持続させようと考えたためだ。

夏のセミナーでは、卒業生が学習方法などを  
 詳細に説明した後、生徒が持参した問題集など  
 から質問をする形式で学習を進め、自学自習の  
 意識を高めた。冬のセミナーは、卒業生による  
 東京大の入試問題を使った講義が中心だ。更に、

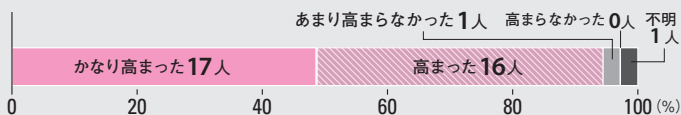
「安積セミナー」



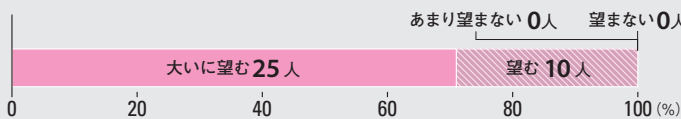
2011年8月に開かれた「安積セミナー」には、1、2年生計43人が出席。夏のセミナーは自学自習の力を付けることに重きを置く。写真は、卒業生が在校生がつまづいている問題に個別に答え、解法を教える様子

2011年度夏のセミナー参加者へのアンケート結果

Q. 安積セミナーに参加して、難関大進学へ向けての意識は高まりましたか



Q. 安積セミナーの開催を今後も望みますか



\* 回答数35人

自由記述回答には、「難関大入試でも基本が大切だと分かった」「あくまで自分で考えることが大切なことを理解した」「効果的な勉強法や学校生活に対する心構えなどが参考になった」といった声が寄せられた。また、「医学部、京都大、東北大の先輩の話も聞きたかった」「シンポジウムや討論会のような形で話を聞いても良かったのではないか」「回数をもっと増やして、夏も合宿のような形にしてほしい」といった要望もあった。

2010年度冬の「安積セミナー」のスケジュール

- 1日目 (安積高校にて)
  - 開講式 (卒業生から一言)
  - 自己紹介・目覚めの勉強
  - 東京大対策授業 (国語、英語)
  - 受験指導「東京大理Ⅲの先輩から受験戦略を学ぶ」
  - 夕食・入浴・自由時間 (先輩とじっくりと話をする時間)
  - 自習
- 2日目 (安積高校から東京大へ)
  - バスで東京大を訪問
  - 東京大教授らの授業を受ける「工学 最前線」「哲学への道」「政治学への道」
- 3日目 (安積高校にて)
  - 東京大対策授業 (数学) / 標準レベル数学特訓 (分野別) (どちらかを選択)
  - 本校初の女子東京大合格者の講演
  - 講演「女性の理系進学について」 / 自習 (どちらかを選択)
  - 成果のまとめ
  - 閉講式 (卒業生からのメッセージ)

\*アンケート結果・スケジュール共に学校資料を基に編集部にて作成

東京大を訪問し、教授の講義を受けた。東京大志望者への意識付けを重視した理由を、森下先生は次のように説明する。

「本校は、福島、そして日本を引っ張るリーダーを育成する使命を担っています。地域の期待に応えられなければ、安積高校の存在意義はなくなってしまいます。東京大は、国立大の中でも予算や人員の配分が大きく研究体制が整っており、大きな夢や目標を持つ生徒の可能性を引き出してくれる大学だと考えています。学生の意識も高く、学びの環境として

も申し分ありません。リーダーを育てるためにも東京大への進学を支援したいのです」

「横」からのアドバイスにより  
目標を高める

セミナーは、生徒にどのような影響を与えているのか。何よりも身近な存在である卒業生から教わることで、学習効果が大きく上がると、教務副主任の野内明先生は話す。

「指導法の面では、当然、卒業生は教師に

比べて未熟です。しかし、卒業生は自身の経験を踏まえて、生徒と同じ目線で教えることが出来ます。教師では、生徒に寄り添おうと努めても、どうしても『斜め上』からの目線になってしまったため、こうした『横』からのアドバイスは、生徒にとって実感のこもった言葉として強く印象に残ります」

目標に対する自覚を持ちやすくなるという効果もあると、加藤教頭は話す。

「部活動の先輩が、実は勉強も頑張っている。そして、高い目標を実現した姿を見て、『自

分にも出来るのではないか』という意識が生まれていくようです。自分と同じ生活を送ってきた本校の卒業生の言葉だからこそ、教師の言葉とは異なる説得力があるのです」

「安積セミナー」成功の鍵は、卒業生の協力にある。10年度実施の際には、123期の東京大合格者のうち5人が、快く講師役を引き受けてくれた。その背景には、学校を盛り立てたいという卒業生の思いがある。

「東日本大震災の際にも、122期生から『こんな時だからこそ、夢を持ち、希望を実現してほしいというエールを125期生（現3年生）に送りたい』という問い合わせの電話がありました。本校で学んだことを思い、母校のために何かしたいと思える卒業生たちがいることが、本校の強みです」（菅野先生）  
「その強みを最大限に生かしたのが『安積セミナー』です。卒業生の中には安積高校を全国にもっと知ってもらえる学校にしたいという強い思いを持った者もいます。教師は卒業生のそうした思いと共に取り組みを進めています」（森下先生）

## 卒業生のアイデアで 参加生徒の志望校の枠を広げる

11年度の夏のセミナーでは、講師に124期の卒業生も加わり、セミナーを軸とした卒業生

からの支援の輪はますます広がりつつある。参加する生徒も1、2年生合わせて43人と増えた。参加者は、東京大だけでなく、東京工業大、一橋大、慶應義塾大、早稲田大の志望者にまで幅を広げた。それらの大学に進学した卒業生も集まり、各大学の魅力を伝え合う講演も開いた。

「前年度のセミナーの総括の際に、『1、2年生の夏の時期で東京大に絞り込んだ指導でいいのだろうか』という意見が卒業生から出され、難関大志望者にまで幅を広げ募集するようにしました。卒業生が進路指導の『参謀』のような存在になりつつあります。こうしたアイデアを出してくれるのも、母校への思いが強いからだと思います」（森下先生）  
卒業生自身も、企画力やプレゼンテーションスキルなどを鍛える場として、セミナーに主体的にかかわっている。

## 上位層は集団指導で、 下位層は個別指導で引き上げる

難関大志望者のみというセミナーの形態は、今後も継続する考えだ。

「これまでは難関大志望者を個別に指導していました。しかし、弱気になって志望を下げってしまうことも少なくありませんでした。仲間の力に注目した集団づくりにより、高い目標の実現を貫く勇気を持ってほしいと思い

ます」（野内先生）

セミナーに参加した生徒は、低学年のうちに卒業生と交流することによって、「どの時期に何を学習しておくべきか」ということが具体的に分かる。積極的に自学を進める一方で、授業に一層身が入るといふ。こうした主体的な学習への姿勢を他の学力層にも波及させたいと、加藤教頭は話す。

「難関大志望者層を集団指導で引き上げ、その姿を見た他の生徒が刺激を受け、学年全体が高い目標に向けて一つになっていくような学校を目指したいと思います。また、中・下位層に対しては、担任をはじめ、教師の個別指導が不可欠です。進路指導部と学年の有機的な結びつきによって、全ての学力層を引き上げたいと考えています」

「入学時、『まさか自分が東京大に入れるはずがない』と思っていた生徒でも、どんどん学力を付けて合格するケースは珍しくありません。生徒が互いの頑張る姿を見て刺激し合えるのが学校で学ぶ意義です」（菅野先生）  
その鍵を握るのが集団づくりであると考え、卒業生の支援を活用した取り組みをますます発展させる考えだ。

「安積高校の卒業生として、大学の先にある将来や、自分が何をしたいのか、何をすべきなのか、よく考える集団に育ってほしいと期待しています」（野内先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2011年4月号指導変革の軌跡「鹿児島県立鹿児島中央高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)